

■絶望における訓練（後編）

今日の私たちについても、同じことが言える。私たちは、都合のよい晴天の日だけよき羊飼いに従う信者で、緑の野、いこいのみぎわで英気を養っている。ところが、やみが深まり、危険が身に及ぶにつれて、「どうして主は、こうなる前に助けてくださらなかったのだろうか。主は私のことなど、何とも思われないのだろうか」といぶかりはじめる。詩篇の記者は、絶望における訓練に先だつ疑いにおける訓練を、直接経験によって身につけていた。それで彼は、低い調子でこうたうことができた。「苦難の日に、私は主を尋ね求め、……私は神を思い起こして嘆き、思いを潜めて、私の霊は衰え果てる。……主は、いつまでも拒まれるのだろうか。……主の恵みは、永久に絶たれたのだろうか。約束は、代々に至るまで、果たされないのだろうか。神は、いつくしみを忘れたのだろうか。もしや、怒ってあわれみを閉じてしまわれたのだろうか」（詩篇 77:2-9）

私たちも、この詩篇記者や弟子たちと同じような経験をすることができる。すなわち、彼らは直ちに恵みある応答を得たのである。「イエスは起き上がり、風をしかりつけ、湖に、『黙れ、静まれ。』と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。……彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。『風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう』（マルコ 4:39, 41）。彼らには（そして絶望の中にある私たちにも同様であるが）、「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです」（40 節）という、主のやさしい、しかもきびしい質問が必要であった。詩篇の記者は、確信を与えられて言った。「神よ。あなたの道は聖です。神のように大いなる神が、ほかにありましようか。あなたは奇しいわざを行なわれる神、国々の民の中に御力を現わされる方です。……あなたの道は海の中にあり、あなたの小道は大水の中にありました。それで、あなたの足跡を見た者はありません」（詩篇 77:13, 14, 19）。こうして、絶望の悲鳴は、救出の歌に変わるのである。

名も知れぬあの取税人は、たましいのこのような経験を味わい知っていた（ルカ 18:9-14）。彼はもはや自分に見切りをつけていた。しかし、もし彼が当時の他の人々のような考え、あるいは今日の人々のような考えを持っていたなら、自分の罪深い状態を家族のせいにしたり、遺伝や環境や友人のせいにしたりしたであろう。彼には全く勝ちめはなかった。家庭は貧しく、教育もなく、非情な目を光らせて人々をうかがい、不誠実なずるがしこい方法で税を取り立てていた。社会的地位のあるパリサイ人は離れて立ち、この取税人を軽蔑した。取税人自身も、そのような自分を卑しめていた。彼は不幸な運命をなじることをしなかったばかりか、神の前に出ても、祈りや断食、十分の一のささげもの、その他律法に関する自分の行ないを、何一つ誇ろうとしなかった。彼はただ哀れな、迷える罪びとであり、「ゆるする者、不正な者」であった（11 節）。彼が責めることができるのは、自分自身だけである。彼は、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と祈った（13 節）。そして、神が即座に、完全に彼をあわれんでくださったので、彼は「義と認められて家に帰」った（14 節）。

自分自身との戦いに疲れ、罪との戦いに疲れて落胆し、ついに彼は全く絶望状態に陥った。も

し神があわれみを示してくださらなかったなら、彼は再び引き戻すことのできない状態に墮落してしまっただろう。彼はダビデと同じような経験をしていたのである。ダビデはこうあかししている。「それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。『私のそむきの罪を主に告白しよう。』すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました」（詩篇 32:4, 5）。自分が失われた罪びとであることを認め、その非を他人のせいにならず、自分のいくばくかの功績を振りかざそうとしない人、罪を深く悔いている人は、同じようにあかしすることができる。「主よ。深い淵から、私はあなたを呼び求めます。主よ。私の声を聞いてください。私の願いの声に耳を傾けてください。主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましよう。しかし、あなたが赦してくださるからこそあなたは人に恐れられます」（詩篇 130:1-4）。絶望の泥沼から引き上げられて、神のあわれみを受け、罪から救われて、心は賛美に満ちあふれる！

スコットランドの故ジョージ・マゼソンは、その著書『人生の旅路の思索』の中で、この絶望における訓練のことに触れている。

「わがたましいよ、あなたのひれ伏す場所を拒んではならない。そこは、王衣をまとうための更衣室である。いにしえの偉人たちに、その繁栄の糸口はどこにあったかを問うてみよ。彼らは、『それは、かつて私がひれ伏した冷たい地にありました』と言うであろう。アブラハムに問うてみよ。彼はモリヤの山における供え物を示すであろう。ヨセフに問うてみよ。彼は牢獄を示すであろう。モーセに問うてみよ。彼はナイル川における危機を語るであろう。ルツに問うてみよ。彼女は自分の労した畑に記念碑を立ててほしいと言うであろう。ダビデに問うてみよ。その多くの歌が暗い夜の経験から生まれたことを告げるであろう。ヨブに問うてみよ。彼は神がつむじ風の中からお語りになったことを思い起こさせてくれるであろう。ペテロに問うてみよ。彼は海の上で主に従った経験を、喜んで語るであろう。ヨハネに問うてみよ。彼はパトモス島における経験を告げるであろう。パウロに問うてみよ。彼は、自分の受けたインスピレーションは、その目を打って見えなくした光のゆえであると言うであろう。さらに、もうひとり-人の子-に問うてみよ、『世を治める力をどこから得られたのですか』と。彼は答えるであろう。『それは、わたしが身を伏せた冷たい地、ゲッセマネです。わたしはそこで王権を与えられたのです』と。わがたましいよ、あなたもゲッセマネの経験によって、美しい花の冠を受けることができる。あなたが避けたいと願う杯こそ、やがて天国で与えられる冠となる。孤独の時はあなたに冠を与え、悲しみの日はあなたにとって大きな喜びとなる。あなたの砂漠はあなたを歌で満たし、沈黙の森はあなたと手を取り合うであろう。」

危険、暗黒、敗北、死が私たちの目の前に迫って来るとき、全能者に向かって絶望の叫びをあげるなら、光と安全、勝利といのちへの救出の冠がもたらされる！ この絶望における訓練を受けることにより、私たちは、力強い主を知ることになる！

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第十五章「絶望における訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。